

【地域教育実践報告】

主体的で深い学びはどこで起こるのか

——経済学部勝浦ゼミナール地域連携PBLの軌跡——

勝浦信幸*

キーワード：協創力、ソーシャル・マネジメント、地域連携PBL、社会人基礎力

1. はじめに

城西大学坂戸キャンパスでは、念願のJOSAI HUBが完成し、さらにJOSAI Squareが整備された。学生たちの満足度も高く素晴らしいキャンパスとなった。ハード面での整備の次はソフト面でのさらなる充実が期待される。その際のキーワードは、やはり「協創力」だろう。

城西大学において「協創力」は、「多様な人々の言葉に耳を傾け、自分の考えを伝えながら交流することによってお互いを理解し、尊重し、皆と協力して新しい価値を創り出していこうとする力」と定義されている。経済学部勝浦ゼミナールでは、地域課題を深掘りし、様々な主体と連携しながら解決を試みる地域連携PBLに取り組んできた。それらの活動を通して「ソーシャル・マネジメント」について実践の中から理解を深めてもらおうというわけである。

本稿では、2013年度から2024年度までの12年間にわたってゼミ生たちと取り組んできた地域連携PBLの軌跡を辿り、多くの関係者、歴代ゼミ生たちに感謝するとともにエールを送りたい。

2. 刺激となった先行事例

私が城西大学に採用された2013年度にはすでに「休耕地活用プロジェクト」が始まっていた。休耕地活用プロジェクトは、大学周辺の休耕地約10ヘクタールをフィールドに、その活用による新たな教育プログラムとしての大学・地域間連携のモデル構築を目指すものであった。

このプロジェクトは数々の大きな成果を残したが、その主なものとして石井雅章先生²のゼミが取り組んだ「オール埼玉ブランド日本酒『醸彩 滝不動』」と末永啓一郎先生³のゼミが取り組んだ「坂戸担々麺」を挙げることができる。

「オール埼玉ブランド日本酒『醸彩 滝不動』」は、休耕地を水田として復活させ埼玉ブランドの酒米「さけ武蔵」を栽培して、オール埼玉ブランドの日本酒の製造・販売をしようというプロジェク

* 経済学部特任教授

1 「ソーシャル・マネジメント」とは、「ニュー・パブリック・マネジメントとソーシャル・マーケティングが結合したもの」（井関ほか2005）とか「マルチステイクホルダーのコンフリクトの最小化とマルチステイクホルダーの変容をマネジメントすること」（大室2014）などと定義される。（勝浦2023）

2 現在は神田外語大学教授（当時は現代政策学部准教授）

3 現在は明治大学教授（当時は経済学部准教授）

トであった。地元農家、酒蔵、酒販売店、行政、飲食店（居酒屋）、地域住民等との連携により製造はもとより広報活動や販売促進イベント開催に至るまで地域連携で取り組み、大きな成果を挙げた。

「坂戸担々麺」⁴は、地元坂戸市特産の小麦「ハナマンテン」、地元製造の醤油、坂戸市推奨の「さかどルーコラ（葉酸）」を活用したラーメンであり、開発・販売には地元農家、製粉会社、ラーメン店などと幅広く連携していた。さらに販促を狙ってカップ麺化の開発まで取り組んだ。カップ麺の開発に至ってはプロ顔負けのパッケージデザイン、クラウドファンディングの活用など、学生たちの活動は広範囲に及んだ。私はカップ麺を100食購入して勝浦ゼミ生たちにも食べてもらった。私だけでなくゼミ生たちにも担々麺で（辛さだけでなく）いろいろ刺激を受けてもらおうという狙いだった。

このように私が地域連携に取り組む頃には、城西大学では様々な地域連携プロジェクトが展開されており、大きな刺激になった。公務員時代に「地域課題を地域の様々な主体の連携によって解決する」という地域協働、地域福祉に携わってきたこともあり、地域連携PBLについて、またその学習成果について、より深く学びたいという気持ちを強くした。

2015年度からは京都大学で毎年開催された「大学教育研究フォーラム」に参加し、時には研究発表やシンポジストで登壇などもするようになった。また、2016年には「未来の学びと持続可能な開発発展研究会」（みがくSD研）のメンバーとなり、学生たちと地域課題に取り組んでいる他大学の先輩教員からも様々な知識・情報を習得することとなる。因みにみがくSD研のモットーは、「師弟同行」（教員も学生も一緒に活動して学ぶこと）、「学会より飲み会」（学会での議論よりその後の飲み会での議論の方が深まることが多い）である。

ある学会で、広島県内の大学の教員から「学生を地域に出すことなど危なくてできない。学生が何をしでかすかわからないし、大学の評価を下げてしまう危険が大きいから」という意見があった。学生を信用できないことはお互いに不幸なことである。私がゼミ生を全面的に信頼できるのは、先行事例の成果や研究会仲間による成功例が影響しているのかもしれない。

3. 勝浦ゼミの地域連携PBL

「PBL」とは、一般に「Project Based Learning」あるいは「Problem Based Learning」の略とされているが、「P」は「Product」「Process」「People」を含めてP⁵BLと捉える大学もある⁵。勝浦ゼミでは、これに「Partnership」を加えてP⁶BLと言うこともある。上記PBLの「醸彩 滝不動」や「坂戸担々麺」は、まさにP⁶BLであった。

また、「地域連携」というと市町村などの地方自治体と連携することが想定されがちである。市町村などの主催によるイベントの場合、すでに企画・内容が決まっているため学生たちが単なるお手伝い（指示に従うだけの作業員）として扱われてしまうことが多い。お手伝いも確かに地域連携活動なのかもしれないし、駐車場の整理や会場内のゴミ集めなども重要な役割ではある。しかし、前述したように勝浦ゼミではソーシャル・マネジメントを研究テーマとしているので、いわゆる「お手伝い」

4 坂戸担々麺は、市内ラーメン店のみならず城西大学の学食でも販売された。

5 スタンフォード大学の「P⁵BL LAB」の例

で終わる連携は避けるようにしている。企画段階からゼミ生たちが参画していかないと目的を見失いがちになり、教育効果もあまり期待できないからである。

勝浦ゼミでは、地域の課題を自分たちで見つけ（自分ごと化）、課題解決に一步でも近づくための企画を絞り出し（idea exchange）、地域の様々な主体（マルチステークホルダー）と調整し（management）、実践するというプロセス（きづきときずな）を大切にしている。ソーシャル・マネジメントは、指示する側、指示される側という関係ではなく、あくまでも対等関係の中で同じ方向に向かういわば「協創」の関係である。このプロセスの過程で、ゼミ生たちは様々な壁にぶつかるなどして貴重な経験を積んでいく。ゼミ生たちだけでなく教員も同様である（師弟同行）。

4. 主な地域連携プロジェクトの振り返り

4.1 主な地域連携プロジェクト

勝浦ゼミが取り組んできた主なプロジェクトは、次のとおりである。

- ・緑のカーテンプロジェクト 2013年度～2018年度
- ・アレックスのレモネードスタンド（小児がん対策支援）2013年度～2018年度
- ・つるがしまHappy³プロジェクト（市民活動のプロモーションビデオ作成）2014年度
- ・灯の川（狭山市）2014年度
- ・プレーパーク 2014年度～2019年度
- ・リレー・フォー・ライフ・ジャパン 川越 2014年度～継続
- ・貧困家庭等への学習支援 2015年度～継続
- ・つるがしまマルシェ（多文化共生社会に向けたイベント） 2015年度～2018年度
- ・Young Americans → Heart Global 2016年度～継続
- ・川島町政策研究 2021年度
- ・高齢者スマホ教室 2022年度
- ・減災のための長野市りんご農家収穫支援 2021年度～継続
- ・レインボーフェスティバル～世界が川島（ここ）に！～ 2022年度
- ・ウクライナ避難者支援ログハウス建設 2023年度
- ・ウクライナ文化交流 2023年度～継続
- ・能登半島被災者支援 2024年度

これらのプロジェクトに取り組むにあたっては、事前に充分学習し、議論し、現場に足を運ぶこと（自分ごと化）を心がけた。

以下、勝浦ゼミの基盤を作ったいくつかのプロジェクトについて振り返ってみたい。

4.2 アレックスのレモネードスタンド（2013年度～2018年度 10回）

アレックスのレモネードスタンドでは、予め小グループに分かれて日大板橋病院の医科長から小児がんの現状や課題等についてレクチャーを受け、小児病棟を見学させていただいた。そこには憔悴し

きった付き添いの母親、チューブに繋がれた乳児など心を痛める光景ばかりがあった。特に私が心を痛めたのは骨肉腫で右足の膝から下を切断した8～9歳の男の子の姿だった。彼のベッドの側にはサッカーボールが置いてあったのだ。サッカー少年だったのだろう。でも、右足を切断したばかりなのに何故ベッドの側にサッカーボールなのか。彼が気を落とすだけでないのか。帰り道で自問自答しながらハッと気づいた。彼は右足を失ってもサッカーを全く諦めてはいなかったのではないかと。片足でもサッカーはできるし、やろうとしていたのではないかと。自分の先入観を恥じた一日になった。さらに小児がんの子どもを持つ親から患者家族の厳しい生活や抱える課題などを学んだ。ゼミ生たちは、厳しい現実を自分ごと化できたからこそ寄付募集の説明にも説得力を持てたはずである。2013年度に高麗祭で初めて出店したが、学内のわかりにくいルールに慣れず、2回目以降は地域の様々なイベント（鶴ヶ島市ハーモニーふれあいウィークやつるがしまルシェなど）の場で寄付を集めた。一日で10万円を超える寄付が集まったこともあった。集まった寄付金はNPO法人サクセスみらい科学機構を通して小児がん治療の研究に役立ててもらった。

4.3 つるがしまHappy³プロジェクト（2014年度）

鶴ヶ島市市民活動推進センター開設10周年を記念して、地域協働推進機構やチームプロGRESSなど市民活動に取り組む有志とともに「市民活動とはみんなをHappyにする活動」ということを知ってもらう動画を制作した。企画段階からゼミ生や市民活動団体のメンバーが議論し、絵コンテなどを作成し、企画、連絡調整、撮影、編集を分担しながら行った。撮影の後半は東武東上線若葉駅東口のワカバウォークを借り切って行ったが、水曜日15時集合に多くのゼミ生が集まった。そのこともあり動画の後半はゼミ生ばかりが登場してしまったので、所期の目的とは異なってしまったかもしれない。しかし、この動画作成のプロセスは、勝浦ゼミを学年を超えたワンチームにしてくれた。ゼミ生たちと他の団体との協働は、ゼミ生たちの結束をさらに固める効果もあった。これ以降のワンチームとしてのゼミ活動に大きな影響を与えたと思う。

このプロジェクトはYouTubeにアップした⁶。

4.4 灯の川（狭山市 2014年度）

狭山市では地元の市民有志たちによって、飯能市名栗を源流とする入間川を市民の大切な資源として、小学生をはじめ多くの市民に周知し、川やその周りの自然に親しんでもらおうというイベントが開催されていた。小学生たちとの植生調査、生き物調査、地引網、カヌー体験など様々な学習機会を提供し、十月には名栗から持ってきた200本の間伐材に火を灯して自然に思いを馳せる「森のろうそく」（松明）を実施する。ゼミ生たち4人は四月から実行委員会のメンバーとなり、趣旨や経緯を十分に理解した上で、準備に取り掛かった。1ヶ月前からの「森のろうそく」の準備（入間川河川敷の草刈り、間伐材の運搬・設置など）と当日にはゼミ生50人ほどが参加した。出店チーム、レモネードチーム、点火補助チーム、消火チーム、会場内安全確保チームなどに分かれて深夜まで活動した。準備段階から3年生を中心に1年生も2年生もよく頑張った。狭山市という本学からは交通不便なとこ

6 <https://youtu.be/paoNTmtEylo?feature=shared>

ろだったので、打合せ会議や準備など学生たちの苦勞もあったと思うが、市民団体の重鎮たちはみな素晴らしい教育者であった。

4.5 リレー・フォー・ライフ・ジャパン 川越（2014年度～）

がん患者は、24時間365日がんと戦い苦しんでいる。アメリカのクラット医師がその苦しみを共有しようと24時間走り続けたことがきっかけと言われている。川越市ではコロナ前まで川越水上公園を会場に行われてきた。高麗祭での勝浦ゼミの小児がん対策支援活動を知った白幡晶先生の紹介で勝浦ゼミ生も実行委員会のメンバーとして企画運営に携わってきた。前日の準備から終了後の撤収まで全員で汗を流した。チームで24時間タスキを繋ぎながら歩き続けることや一晩一緒に過ごすことなどは、なかなかできない体験でもあり勝浦ゼミのチームづくりにはとても有効だった。

なお、この活動はコロナ禍以降、実施形態が変わった。一定期間に各自が歩いた歩数に応じて協賛企業が対がん協会に寄付をするというセルフ・ウォーク・リレーという形態になっている。

4.6 つるがしマルシェ（2015年度～2018年度）

前述のように2014年度は新たなプロジェクトに挑戦し続けた年であった。私が採用されたのが2013年度なので翌2014年度から初めてゼミナールⅠを担当することができた。ゼミナールⅠの3年生（ee2012のゼミ1期生）たちは、仲も良く1年生2年生たちへの面倒見も良かった。後輩たちにとっての良き兄であり姉であったと思う。学年を超えたチームワーク、信頼関係の深さが次世代への連鎖となり、次々とその後の新たなプロジェクトへの挑戦に繋がった。これが勝浦ゼミの特徴でもあった。

2014年度末、東武東上線若葉駅西口広場が東口に比べて閑散としていて寂しいし、もったいないといった声がee2013ゼミ2期生から出始めた。賑わい創出と地域課題解決に向けたイベントを考えようとゼミ生たちは若葉駅西口周辺を歩きまわった。そこで出会ったブラジルレストランのシルビオ・ムラモトさんの話に心を打たれたゼミ生たちは、多文化共生のイベント、国際フェスティバルをやりたいと決意した。

ムラモトさんの話は次のようなものだった（後日ゼミ2期生全体にもムラモトさんから直に話してもらった）。

2月の大雪の夜に若葉駅西口で一人ベンチに座っていた高齢者がいた。電車もなくタクシーもバスもない深夜だった。ムラモトさんが「私のお店で一緒に暖まっていませんか？」と声をかけたが「あんたが怖い」といって断られてしまった。ムラモトさんはショックだったが、「自分たち外国人が地域で受け入れられていないこと、それは外国人が地域に馴染もうとしていないからかもしれない。外国人も出身国同士で固まってしまう外国人同士の交流もできていない。災害があったとき、出身国や国籍など関係なく助け合えないといけないのに。だから出身国や年齢、障害の有無などに関係なく、みんなで交流して楽しめるようなお祭りがしたい。」

ゼミで何が問題なのか議論した。すでに外国出身者とともに生きているのにそれに気づいていない日本人が多い。自治体広報も日本人向けの情報発信が中心で共に暮らす外国人の存在を忘れてしまう。どうするか。ゼミとしてのミッションは、外国人とすでに共生していることを「可視化すること」となった。

10カ国以上の食と音楽・ダンスを紹介・交流して多文化共生を可視化するとはいえ、資金も資材も何もない勝浦ゼミ生たちには、次から次へと大きな壁が立ち塞がった。ステージはどうするのか、音響設備はどうするのか、出店者用のテントはどこから借りるのか、借りたテントをどう運ぶのか、それをどこに保管するのか、出演者への謝礼はどうするのか、周知方法・ポスターやチラシはどうするのか、消防、保健所、警察、市役所への手続きはどうするのか…

NPO法人、市役所、地元事業者、報道機関など多くの協力を得て、ひとつひとつ壁を乗り越えていった。ee2013ゼミ2期生たちの粘りは素晴らしかった。

達成感を感じたゼミ生たちは、2015年度内に2回（5月と10月）もつるがしマルシェを開催した。その後もつながったネットワークと経験を活かして、2016年度、2017年度と開催することができた。つるがしマルシェをやりたいとって勝浦ゼミを希望する学生もいた。確かに学年を超えた意欲の連鎖があったと思う。

しかし、2018年度に状況は一変する。ee2016のゼミ生たちと5月に市役所に挨拶に伺った際、「今年から若葉駅西口広場の使用は許可しない」とのお達しがあった。理由は、昨年度のイベントの際に騒音についての苦情が市役所にあったからということだった。ゼミ生の一人が「苦情を言ってきた方を教えていただければ、私たちが伺って謝罪するとともにイベントの趣旨を説明したい」と申し出た。実に大人な対応で立派だった。ゼミ生の成長には感動した。残念ながら市役所側からは「苦情を言ってきた人はわからない」との回答だった。（後の調査で苦情の主は一人だったとのこと）

若葉駅西口広場が使用できないからとって諦めるようなゼミ生たちではなかった（実は私は諦めようと思っていたが）。新たな壁を乗り越える意欲は十分だった。9月末、鶴ヶ島駅前の民間施設（結婚式場）の駐車場を借り、それまでピアガーデンを開催していたグループと合流して「第5回つるがしマルシェ×夏の終わりのピアガーデンLIFE祭」の開催にこぎつけた。新たに調整先も増え、作業量の負担も大きくなったにもかかわらず、よく頑張ったと思う。

つるがしマルシェについては、もう一度企画を名称から練り直そうということになり2019年度は休止とした。2020年度は予想もしなかったコロナ禍となり、それ以降このプロジェクトの開催は難しくなってしまった。

4.7 COVID-19：新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の流行による行動制限は、学年を超えてプロジェクトを実施してきた勝浦ゼミにとって厳しいものとなった。2020年度は全てオンライン授業でスタート、入学式もなく1年生同士は顔を合わせたこともない。まして学年を超えた交流や活動など全くできない。と諦めかけていたところ、2020年度前期の終わり頃、2年生3年生ゼミ生有志から後期のゼミは対面でやりたいとの要望が寄せられた。そこで時限を分けて対面でのゼミとオンラインでのゼミを選択できることとした（ハイブリッドではない）。

さらに、リレー・フォー・ライフの実施形態がセルフ・ウォーク・リレーに変わったので、ゼミ生全体でこれに参加し、それぞれの歩数の状況を競い合ったり情報交換したりすることができた。ゼミ生たちの希望により、感染症対策に気を使いつつ川越WALKや坂戸WALKといったリアルの場での活動も行った。

何とか学年を超えた交流や活動を継続したいと思ったが、コロナ禍以降はプロジェクトへの参加希望者が減少していく。集団から個への転換が社会全体としても加速したと思う。

4.8 減災のための長野市りんご農家収穫支援（2021年度～継続）

2019年に日本列島を襲った台風19号による長野市のりんご農家の被害は甚大であった。ゼミでも話題になった。「台風の進路予想は5日以上前からわかるのだから、台風が来る前に一気に収穫してしまえばいいのに…」という素朴な疑問に、長野市出身のゼミ生から「りんご農家は高齢化しているし、りんごは意外と重い、脚立に登って収穫するのも大変なんだよ」との声があった。勝浦ゼミは、地域の課題を見つけて解決を試みる実践的なゼミである。「翌年みんなで収穫の手伝いに行こう」ということになった。しかし、翌年2020年度はコロナ禍で行動制限もあり実施できず、2021年度からの実施となった。10月の土日の1泊2日で行う。交通費も宿泊費も自己負担だ。ゼミ生のプロジェクトリーダーが、りんご農家との連絡調整、宿泊施設確保、交通手段調整、参加者への周知など様々な仕事を担う。2021年度、2022年度、2023年度、2024年度と次第に参加者が増え、2024年度は2回実施した。

コロナ禍以降はプロジェクトへの参加者希望者が減少したと前述した。また、勝浦ゼミには2023年度は3年生と4年生のみ、2024年度は4年生しかいない。私が2024年度末で退職するからである。にもかかわらず、このプロジェクトの参加者が増えているのは、ゼミOBOGたちたちの参加、勝浦ゼミに入りたくて本学経済学部に入学してきたという1年生、2年生の参加も認めていることと再参加、再々参加などリピーターが多いからである（2024年度は後述のウクライナからの避難者や職員の参加もあった）。りんごの収穫も達成感があり楽しいが、それだけではなく温泉に1泊して年代を超えて語り合うことを楽しみにしている参加者が多い。「合宿である」ということに人気があるように思う。期せずしてOBOGを含めた幅広い年代の交流が実現している。

4.9 ウクライナ避難者たちとのつながり

ここではウクライナ避難者支援について簡単に述べたい。

2022年2月24日未明、ロシア軍はベラルーシとの国境を超えウクライナに軍事侵攻し首都キーウにはミサイルを打ち込んだ。この戦争が始まったばかりの頃は遠い国のできごとのように感じたが、ロシア軍侵攻によるウクライナの惨状が明らかになるにつれて、何か自分たちにできることはないか自問するようになった。それはゼミ生たちも同様であった。



写真1 2023. 4. 11

2023年3月末、災害復旧NPOの代表をしている知人から「ウクライナのザポリージャから避難している人のためのログハウスの建設を一緒にやらないか」との連絡があった。役に立てることなら何でもやりたいという気持ちとログハウス建設などやったこともないしできるとも思えないという想いが交錯しつつ、とにかく現場に向かった。その日現場にいたのは、平林アンナさん、根本ユリアさん、そしてセルゲイさんの3人だけ。素人から見ても完成までの

道のりが厳しいことは明らかだった。(写真1)

このプロジェクトの登場人物と互いの関わりについて少し説明したい。ロシアのウクライナ侵攻前から坂戸市在住の根本文雄さんと妻ユリアさん（ウクライナ出身）がウクライナの建築資材（ヨーロッパアカマツなど）を活用した安価で質の高い住宅を日本に広めたいと計画し、輸入手続きや現地職人との調整を進めていた。戦況が悪化の一途を辿る中、ユリアさんの父セルゲイさん、母リュボフさんと甥のブラッドさんを日本（東松山市内の公営住宅）に避難させ根本夫妻が生活を支援していた。一方、川口市在住の平林祐介さんと妻アンナさん（ウクライナ出身、ユリアさんの友人）もアンナさんの母ニナさんを日本に避難させた。平林夫妻はニナさんと同居しようと考え、根本夫妻に嵐山町にウクライナのログハウスを建設したいと相談。根本夫妻が協力を申し出たものの、戦況悪化により職人のウクライナ出国が困難となり日本に入国できなくなってしまった。建築資材は横浜港に次々と到着するも建設する職人が来ない。戦禍がいつ治るかわからないという状況に加え、避難してきたセルゲイさんたちは言葉も通じず、買い物もできずに公営住宅に閉じ籠りとなっていた。そこでセルゲイさんたちの健康や生きがいのためにも自分たちで平林さん、ニナさんのためのログハウスを建築してしまおうということになった。



写真2 言葉でなく見様見真似で

ゼミ生たちに事情を説明すると「ウクライナから避難している人たちがこんなに身近にいるとは知らなかった。ぜひ応援したい。」との声が多く、ゼミとしてできる限り応援することとなった。ただし、ゼミ生には「長期間かかることが予想されることからあくまで授業を最優先にすること」「危険なことは頼まれてもしないこと」「ボランティア保険に加入すること」「途中で投げ出さない覚悟が必要なこと」を徹底した。

このプロジェクトで解決すべき課題は何か。ログハウスの建設が課題だと捉えられやすいが、私がゼミ生たちに求めたのは、命からがら戦禍から逃れて日本に避難してきたセルゲイさんたちを笑顔にすることである。ログハウス建設中も節目ごとにセルゲイさんたちとバーベキューや川遊び、飲み会を繰り返してきた。ウクライナ語は誰も（私も）わからないが、共に楽しい時間を過ごすことができた。一緒に何かに取り組みれば言葉の壁などほほないことがゼミ生たちにもわかったと思う（写真2・写真3）。



写真3 完成後のバーベキュー

ウクライナからの避難者たちとは、ログハウス完成後も、ウクライナ料理、クリスマス飾りのジドゥフやプーサンカの制作などの文化交流や長野市りんご農家応援

プロジェクトへの参加など様々な交流が続いている。

5. 地域連携PBLの成果

地域連携PBLの学修成果について詳しくは2019勝浦を参照していただきたいが、その中で2017年度の3年ゼミ生たちが卒業する直前（2019年1月）のデータが欠けていたので、ここにその際の社会人基礎力尺度の調査結果のデータを加えたレーダーチャートを示しておきたい（図1）。

社会人基礎力尺度の調査票は、経済産業省が提唱している「社会人基礎力」の12の能力要素、すなわち、①主体性、②働きかけ力、③実行力、④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力、⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、⑪規律性、⑫ストレスコントロール力、のそれぞれに4つの質問、計48の質問項目で構成されている。

図1からは、同じゼミ生の2017年4月の調査結果（3年の初め）、2018年1月の調査結果（3年の終わり）、2019年1月の調査結果（4年の終わり）を比較すると学年が上がるにつれて社会人基礎力の12の能力要素のうちストレスコントロール力を除く11の能力要素を向上させていることがわかる。



図1 社会人基礎力調査結果

なお、数値は、「生きる力（社会人基礎力尺度）についての意識調査」の12の能力要素ごとの4つの回答の1から4までの数値を単純に集計したものである。「あまりそうしなかった」は1pt、「たまにそうした」は2pt、「たびたびそうした」は3pt、「いつもそうした」は4ptとし、12の能力要素4問ごとに加算することにより算出した。12の能力要素ごとの最低点は4（1pt×4問）、最高点は16（4pt×4問）となる。

6. むすび

地域連携PBLが学生たちの主体的で深い学びに直結し、社会人基礎力の向上に資することには異論はないだろう。藤野陽三学長が掲げた「協創」「協創力」は、地域連携PBLの強力な推進力となるはずである。つまり、地域連携センターの役割がますます重要になるということである。

地域連携PBLの取り組みについては課題もある。これまで地域連携PBLというと特定の教員の授業やゼミごとでの出来事であった。オール埼玉ブランド日本酒「醸彩 滝不動」などの石井雅章先生、「坂戸担々麺」などの末永啓一郎先生、そしてローカルヒーローで地域に愛され続けた石井龍太先生は、城西大学から他大学に移られてしまった（私も2025年3月末で定年退職する）。担当の教員がいなくなると取り組んできた地域連携のプロジェクトも消えるというのは、あまりにももったいない。地域の多様な主体との信頼関係は一朝一夕には生まれえないからである。

また、自戒を込めて言えば、連携と言いながら学部内の連携、教員職員間連携、学部間連携、大学

間の連携は十分なのか。その課題意識は重要であり、協創がさらに発展するためのポイントにもなると思う。地域連携センターへの期待が膨らむ一方、2024年度から始まった共通基盤科目「協創力体験演習」「協創力実践演習」は、全学部の教員が協力して進めることから、学生たちだけでなく教員・職員の連携意識にも大きな影響を与えるはずだ。2～3年後がとても楽しみである。その場にいられないのが少し残念ではあるが。

謝辞

2013年度からの12年間、楽しく地域連携活動に取り組めたのは、多くの方々のご協力、刺激、支えがあったからに他ならない。何より意欲いっぱいゼミ生たち、ともに笑い、語り、泣き、苦しみ、怒ったりもした。チームプロGRESSには勝浦ゼミのスタートアップ時に強力にサポートしていただいた。本学の先生方、名前を挙げきれないくらいたくさん先生方との語らいや励ましが背中を押してくれた。学外の研究会や学会の先生方、地域のNPOや行政の関係者、地域の事業者の方々、プロジェクトと一緒に取り組んでくださった市民の方々、誰一人欠けても勝浦ゼミの地域連携PBLは実践できなかったし、これまで続けることはできなかった。

言葉は足りないが、この場を借りて心から感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 勝浦信幸 (2019) 「地域連携 PBL における学修成果の可視化について」『城西大学教職課程センター紀要』3, 45-60.
- 2) 勝浦信幸 (2020) 「オンラインゼミの実践と課題-学問による人間形成に向けて-」『城西大学経済学部オンライン初年次教育実践報告集』, 19-24
- 3) 勝浦信幸 (2023) 「地域連携PBLの活動報告-2022年度の主なプロジェクトの振り返りから-」『地域と大学-城西大学・城西短期大学地域連携センター紀要』3, 27-40.